

ハンス・フォン・マレー（もしくはハンス・フォン・マレーズ） の伝記について

高阪 一治*

Hans von Marées.His Brief Biography

KOSAKA Kazuharu*

キーワード：ドイツ美術，19世紀美術，ナポリ臨海実験所，マレー，マレーズ

Key Words：German Art, 19th-Century Art, The Naples Zoological Station, Hans von Marées

I. はじめに

ハンス・フォン・マレー¹⁾ (1837-1887) は周知のごとく19世紀後半のドイツを代表する画家のひとりである。近代芸術学の祖と称されるコンラート・フィードラー (1841-1895)，及び同時期の代表的な彫刻家にして美術理論家としても知られるアドルフ・フォン・ヒルデブラント (1847-1921) との交わりのなかで語られる彼は，また，バックリー (1827-1901) やフォイアーバッハ (1829-1880) とともに，「ドイチュ・レーマー」(ローマのドイツ人画家ないし美術家の謂) のひとりに数え入れられる人物である。彼の人生の後半は，イタリアの地にあった。

彼の現存作品はベルリンの他に，その多数がミュンヘンのノイエ・ピナコテークに所蔵，展示されている。ノイエ・ピナコテークの一室をしめるその作品群は，フィードラーの寄贈によるものである。全般的に暗い色調を有する画面のなかに色彩家としての側面を覗かせるマレーの作品は，その後期の作品になると画面がはなはだ大きくなる傾向を示すが，それらは，ナポリの地において味わった唯一の機会である，一室4面の壁をフレスコ画で描いた経験のいわば再現を願う代替作品といえるものであった。

その彼のフレスコ画があるナポリ臨海実験所²⁾は海洋生物の研究では世界的に知られた研究所で，数多くのノーベル賞受賞者を輩出し，日本のこの分野の研究者にもよく知られた場所である。実際，わが国からも多数の研究者がこの実験所で研究を行っている。東京大学第3代動物学教授箕作佳吉とその東京大学三崎臨海実験所の創設に，このナポリ臨海実験所とその創設者アントン・ドールンが深く関係していることは，よく知られた事柄だという。³⁾

青木繁の《海の幸》とマレーのナポリのフレスコ画《漕ぎ手》，及びベルリンにあるその油彩習作との何らかのつながりがわが国及び外国の一部で考えられてきた。筆者も調べたことがあるが，確証といえるものは出ていない。⁴⁾

ハンス・フォン・マレーについては，その作品がわが国に来たのは，1985年11月から12月にかけて

*鳥取大学地域学部附属芸術文化センター

て兵庫県立近代美術館にて、また翌年2月から3月にかけて東京国立近代美術館で開催された「プロイセン文化財団ベルリン国立美術館所蔵 19世紀ドイツ絵画名作展」における、3点の絵(油彩習作2点を含む。)であった。すなわち、《船を漕ぐ男たち》《オレンジを摘む男》《黄色い帽子の自画像》であって、この作品名表記はこの展覧会の図録による。⁵⁾ また、このときの作者の表記はハンス・フォン・マレースである。なお、上記の《漕ぎ手》と《船を漕ぐ男たち》とは同一作品である。この展覧会期間中、東京国立近代美術館を通じて一般鑑賞者から、《船を漕ぐ男たち》は青木繁の《海の幸》を思わせるものがあるが両者の関係はどうか、という問い合わせがあり、筆者に意見が求められたが、上に触れたように、確かな証拠をもって何らかの関係を指摘する事はできない旨を回答せざるを得なかった。

ともあれ、ハンス・フォン・マレーについては少なくともわが国においてははまだその詳細が知られているとは到底言いがたい。そこで今回はマレー研究の前提となる彼の伝記について、今日でもその評価は揺るがないマイアー＝グレーフェのマレー研究を土台に、以下の文献を参考にして筆者が調べたところを少し記してみたい。本略伝に特色があるとするならば、マレーの出自、系譜について多少とも詳しく述べた点であるかも知れない。なお、言うまでもないがこの略伝は完全なものではあり得ず、誤りを含む記載の不備なところは他日を期したい。

Ⅱ. ハンス・フォン・マレー 略伝

注意

1. 略伝を作成するにあたっては以下のものを参照した。

J.Meier-Graefe, *Hans von Marées, Sein Leben und sein Werk*. 3Bde, München 1909/10. (Bd.1, Geschichte des Lebens und des Werkes, 1910. Bd.2, Katalog, 1909. Bd.3, Briefe und Dokumente, 1910). Thieme-Becker, *Künstler-Lexikon. Lexikon der Kunst*, 5Bde. Leipzig 1968/78. Uta Gerlach-Laxner, *Hans von Marées. Katalog seiner Gemälde*. München 1980. Christian Lenz (Hrsg. von), *Hans von Marées*. Ausst. Kat. München 1987. Lea Ritter Santini und Christiane Groeben (Hrsg. von), *Arte come autobiografia. Kunst als Autobiographie. Hans von Marées*, Napoli 2005. Angelika Wesenberg (Hrsg. von), *Hans von Marées. Sehnsucht nach Gemeinschaft*, Ausst. Kat. Dresden 2008.

2. 作品番号を示す際に MG とは上記マイアー＝グレーフェ (J.Meier-Graefe, *Hans von Marées*.) の第2巻におけるカタログ番号を言い、GL とは上記ゲルラハ＝ラクスナーのカタログ番号を言う。

3. 作品の所蔵先については以下のように略記する。

K.H.B.	Kunsthalle Bremen
K.H.H.	Kunsthalle Hamburg
L.M.H.	Landesgalerie Sachsen-Anhalt, Moritzburg, Halle
N.G.B.	National Galerie Berlin → A.N.G.B. Alte national Galerie Berlin
N.P.M.	Neue Pinakothek München
O.S.C.B.	Orangerie, Schloß Charlottenburg, Berlin
S.G.M.	Schackgalerie München
S.K.K.	Staatliche Kunsthalle Karlsruhe
S.K.M.	Staatliche Kunsthalle Mannheim
W.R.M.K.	Wallraf-Richartz-Museum Köln
S.Z.N.	Stazione Zoologica Anton Dohrn di Napoli

4. 焼失作品については以下を参照した。

Klaus P. Rogner (Hrsg. von), *Verlorene Werk der Malerei*. In Deutschland in der Zeit von 1939 bis 1945 zerstörte und verschollene Gemälde aus Museen und Galerien. München c.1965.

マレー略伝

1837 12月24日ドイツ西部のエルバーフェルト Elberfeld（今日のヴッパータール Wuppertal）に、プロイセン王立デッサウ上級裁判所長官（der kgl. Preussische Kammerpräsident aus Dessau）である父親アドルフ・フォン・マレーと、ハルバーシュタット出身のフリーデリケ・ズスマン（旧姓）との間に、三男として生まれる。

父は高名な法律家 Jurist, 政治家 Politiker にして、詩人。コブレンツでは上級裁判所長官（Kammerpräsident）および Vorsitzender des konstitutionellen Vereins（立憲クラブの代表）をつとめ、ラインラントの政界に重きをなした（マイアーグレーフェ, 上掲書, 第1巻17頁）。父方がフランス系であるのに対し、母方はユダヤ系。ハンスの母は多国語を話し、当時の女性には珍しく古典語を解するひとであった（同書29頁）。

マレーの家系の根は北フランスのマレー（Maretz）村。この地はカンブレ（Cambrai）郡にあり、ヴァランシエンヌ（Valenciennes）からほど遠からぬビュシニ（Busigny）の近くである。家系の一部はここから出て16世紀にオランダに移る。

画家ハンスの系統はこれに属し、18世紀初頭にドイツに入った。マレー家は早くからプロテスタントであり、19世紀にいたるまで熱心なルター派であった。ハンスの祖父カール・ヴィルヘルムは家系に法律職をもちこみ、デッサウ（Dessau）の上級裁判所長官（Kammerpräsident）となる。1826年彼は公爵（Herzog）の世襲貴族に任ぜられ、以後、彼および彼に続く者は“de Marées”でなく“von Marées”を名のことになる。ミュンヘンの宮廷画家であったジョルジュ・ド・マレー（George de Marées 1697-1776）は、画家としてハンスに先立つ者である（同書, 15, 16頁。なおマイアーグレーフェ, 上掲書, 第3巻, 210頁には、マレー家の家系図が挙げられている）。

1847 一家はコブレンツに移る。

1849 この地の王立ギムナジウムに入り、1852年に終える。

1853 春、ベルリンで美術研究を始め、美術アカデミー予備クラスに1年ほど通う。

1854/55 「馬の画家」として知られるカール・シュテフェック（Carl Steffek 1818-1890）のアトリエに移って制作。フランツ・クリューガー（Franz Krüger）とアドルフ・メンツェル（Adolph Menzel）の作品を知る。現存する最初の油彩作品である肖像画が生まれる。

1855/56 コブレンツの第25歩兵連隊で兵役義務につく。

1857 夏、ヴェルリッツの森林監督官（Forstmeister）である叔父アレクザンダー・フォン・マレーを訪ねて5ヶ月滞在。この時期、公爵フリードリヒ・フォン・アンハルト（Friedrich von Anhalt）の制作依頼による肖像画や一連の馬の図が生まれる。冬、ミュンヘンに移る。この地で親しくなった者に次の人たちがいる。カール・ラウプ（Karl Raupp）、ヴィルヘルム・ボーデ（Wilhelm Bode）、フランツ・レンバッハ（Franz Lenbach）、ハインリヒ・ラング（Heinrich Lang）、エルンスト・クンデ（Ernst Kunde）、アドルフ・リア（Adolf Lier）、ダイートリヒ・ランコ（Dietrich Langko）、ユリウス・ネル（Julius Nörr）、その他である。

1859 夏、国土防衛軍（Landwehr）への招集を受けノイヴィート（Neuwied）へ赴く。ミュンヘン

で最初に生まれたのは、ベルリンの伝統に即して（同時代の出来事とともにプロイセンの歴史を物語るものである）軍人を描いた図であった。

- 1860頃 風景画、軍人の図、数多くの自画像とミュンヘンの画家仲間を取り上げた肖像画の成立。この後者の肖像画にはオランダ絵画、とりわけレンブラントの影響が顕著。おそらくオランダへの最初の旅行をした模様。
- 1860/61 間接的ながらも、18世紀およびバルビゾン派からのフランス絵画の影響。
- 1863 夏、サンクト・ペテルブルクのバロン（男爵）・ステイーグリッツ（Baron Stieglitz）の依頼にもとづき、ロシア人画家・画商のウラディミール・スヴェルチュコフ（Wladimir Swertschkoff）のためにミュンヘン郊外のシュライスハイム宮（Schleißheim）で制作。さらに、これまでの画業の頂点をなす重要な油彩画の成立。18世紀、とくに19世紀のフランス絵画の影響が見て取れるが、《ディアナの憩い》(MG 101, GL 61. N.P.M.)にはどこかヴェネツィア・ルネサンス絵画への傾斜がうかがえる。
- 1864 5月ロッテルダム旅行。男爵アドルフ・フリードリヒ・フォン・シャック（Baron Adolf Friedrich von Schack）が、美術協会展に出品された《家畜水浴び場》(die Schwemme. MG 110, GL 68. S.G.M.)を購入。そしてまもなく、おそらくレンバッハの推挙で、イタリアにある古画の模写という仕事をマレーに依頼する。10月、おそらくレンバッハと一緒に、シャック男爵のための模写活動でイタリア（ローマ、フィレンツェ）に赴く。ローマでベックリー（Arnold Böcklin 1827-1901）と知り合いになる。
- 1865 イタリアでシャック男爵のための活動に従事。レンバッハとともにフィレンツェに移動して同活動に励む。フォイアーバッハ（Anselm Feuerbach 1829-1880）と知り合いになり、彼とともにローマに戻る。
- 1866 冬、弁護士にして芸術哲学者であるコンラート・フィードラー（Konrad od. Conrad Fiedler 1841-1895）とローマで知り合いになる。マレーにとって生涯重要なつながりが生まれる。
- 1867 4月、ローマで10歳若い彫刻家アドルフ・フォン・ヒルデブランド（Adolf von Hildebrand 1847-1921）と知り合いになり、やがてふたりの間で親しさが増していく。
- 1868 10月、仕事としての模写を続けることに我慢がならず自作を描き始めたことがもとで、シャック男爵との関係が切れる。このときから、以後の経済的支援はコンラート・フィードラーが行う。イタリア・ルネサンス絵画と精力的に取り組む。
- 1869 マレーはフィードラーの経済負担のもと、誘いを受けて、彼とともに、スペイン、フランス、ベルギー、オランダをめぐる研究旅行に出る（4月から8月まで）。フランス絵画との新たな接触。とりわけ今度はドラクロワとマネ。
8月末から9月はじめにかけてコブレンツの父親のもとに滞在する。9月半ばから11月半ばにかけて、ライプツィヒ近郊のクロステヴィッツ（Crostewitz）にあるコンラート・フィードラー宅に過ごす。マレーは数日をドレスデンで送った後、またフィードラーとともにウィーンに向かう。そこからイタリア各地を経てフィレンツェに着き、11月末にローマに戻る。
- 1870 7月、コブレンツへ。普仏戦争の招集に応じて短期間、軍務に着く。10月、ベルリンに移り、ヒルデブランドとアトリエをともにして制作。肖像画がほとんど。
- 1871 夏をドレスデンと、クロステヴィッツのフィードラー宅で過ごす。
- 1872 4月、ドレスデンへ移る。フィードラーがマレーのために当地のコッペル家（Koppel）の庭先に建てたアトリエで制作。多くは依頼を受けての肖像画制作。その肖像画にマネとゴヤの

影響が見てとれるとする指摘あり。

- 1873 1月、フィードラー宅でマレーがドイツの動物学者アントン・ドールン（Anton Dohrn 1840-1909）に会い、話している中に、ナポリ臨海実験所（die Zoologische Station Neapel）の南側、音楽室・休養室として検討されている大きな部屋を装飾することで、普通の部屋にはない晴れやかな雰囲気（ein feierlicher Charakter）を創り出そうという計画が持ち上がった。
- 5月、マレーはウィーン経由で（タウバー Tauber家を訪問して）ナポリへ。7月から11月までは、アントン・ドールンによって前年に創設されたナポリ臨海実験所の大きな部屋を、アドルフ・フォン・ヒルデブラントの協力を得て、5点の大作からなる一連のフレスコ画で飾ることに従事（MG193-224, GL120. S.Z.N.）。この一連のフレスコ画はこれまでのマレーの画業の頂点を示すものであるとともに、19世紀ドイツ絵画の最高傑作（eine Höchstleistung）というべきものである（デーゲンハルト、グローテ、フォン・アイネム）。
- 11月の終わり、フィレンツェに移動。この地の元の修道院サン・フランチェスコ・ディ・パオラ（S.Francesco di Paola）でヒルデブラントとアトリエと住居を共同で使用。後に、この元の修道院をヒルデブラントが購入。
- 1874 3月、父の死。コブレンツに行く。そこから引き続き、パリにいるコンラート・フィードラーのもとを訪ね、短期間そこに滞在。フィレンツェでの旺盛な生産活動。またアルノルト・ベックリーンとの結びつき。
- 1875 ヒルデブラントと、後にその妻となるイレーネ・コッペル＝エルフェルトとの関係のために、9月、マレーとヒルデブラントとの友人関係が断絶。これをきっかけにフィードラーもマレーに対して距離を取り始める。マレーはローマに移る。短期間、イタリア国内やドイツへの旅行をすることがあったとしても、こののち、基本的にローマに滞在。
- 1876 彫刻家アルトゥーア・フォルクマン（Arthur Volkman）が狭い意味でのマレーの一番弟子となる。
- 1878 メッセージ力の強い作品《人生の諸段階》（die Lebensalter）、別名《オレンジの図》（Orangenbild）（MG280, GL123. N.G.B.）が描かれる。
- 1879 最初の三連画として《ヘスペリデス》（die Hesperiden）の第1版の制作が始まる。その右翼図は《黄金時代I》（MG457, GL146. N.P.M.）へとつながる。こうした三連画の制作は、モニュメンタルな絵画（Tafelmalerei）を達成しようとする努力を物語るものである。4点の三連画のうち、なかでも《ヘスペリデス》は、フレスコ画制作の後に増大してきたモニュメンタルな、スケールの大きな作品（Monumentalität）を達成したいという画家の欲求が最も熟成した作品である。ここには、画面を決定づける（die Bildfläche bestimmend）形の كانون（Figurenkanon 形の規準）の獲得が認められるが、その形の كانون は個人の生命が殆ど感じられない人物形態や、また、内容的陳述には役立たず全体構成（die Gesamtkomposition）の形の成分（die formale Gliederung）として役に立つ、姿勢と身振りから成り立っている。これは抽象的な絵画形体（die abstrakte Bildform）の発展にとって意味のある芸術的行為である。
- 1880 画家と彫刻家からなるマレーの弟子サークルができる。フィードラーとの文通による芸術論の考察。この年、マレーがいささかより大きな活動の自由を得ることを期待してフィードラーに追加的な経済支援を求めたことから、フィードラーとの関係がこじれる。たとえフィードラーがこれからも、進んでマレーを経済的に支援するという彼の義務をはたすことに変わりがないとしても、このマレーの不当な要求のせいで、フィードラーにしてみればこ

の数年来、この芸術家との関係を苦しめる元となっていた緊張状態が顕わとなる。この時点でも明白となった両者の破局は、のちにあらたに接近することになろうとも、決して完全に克服されることはなかった。

マレーは三連画《パリスの審判》(MG567-570, GL152)を描き、さらに、《悪竜を退治する者》(聖ゲオルギウス MG506, GL151. N.G.B)を描いているが、そこでは画家自身を描いている。この表現に関係があることとしては、一般に、自身の芸術のための闘いが挙げられるが、それとともに、フィードラーとのこうしたこじれた関係も、考慮される。画家カール・フォン・ピドル(Karl von Pidoll)はマレーの弟子として彼のもとで制作を開始する。

1881 三連画《三騎手》第1版の成立。年末、マレーとフィードラーは再び親しく接するようになる。

1882 マレーは弟子の彫刻家フォルクマンとブルックマン(Bruckmann)を指導するうちに、これに触発されて自作の彫塑作品の制作にとりかかる(《ネストル》MG658-681)。

1883 1882年に始まった《馭者とニンフ》(Pferdeführer und Nymphe MG611, GL158. N.P.M.)が現存状態になる。

ピドルの招待を受けて夏をLuxemburgで過ごしその地で主に肖像画からなる一群の作品を制作するも大半は失われる。最後の自画像を描く。

1884 この年ベルリンで開催が計画されていた展覧会が芸術家の病気のために実現せず。画家は療養のためにヴィースバーデンに向かい、その地で久しぶりにヒルデブランドに遭遇する。この年、死にいたるまで制作し続けたかなり多くの作品の、制作を開始する(《求婚》MG916-918, GL163. N.P.M. 《三騎手》第2版MG592-595, GL157. N.P.M.)

1885 マレーは兄弟が経済的困難に陥ったためにベルリンで小さな展覧会を開くことになったが、この展覧会の反響はなかった。《ヘスペリデス》第2版(MG418-421, GL143. N.P.M.)を描く。弟子の一人、彫刻家ルイ・テュアヨン(Louis Tuailon)が親しくマレーに接する。

1887 《ガニユメデスの誘拐》の完成。50歳を前にしたマレーは、ローマで6月5日に歿する。

注

- 1) ここではハンス・フォン・マレーと表記するが、ハンス・フォン・マレーと表記されることがある。なお、表記に関しては、以下のものを参照した。*Duden Aussprachewörterbuch. 2., völlig neu bearbeitete und erweiterte Auflage. Duden Band 6. 1974.* 『岩波 西洋人名辞典 増補版』岩波書店, 1981. 『新潮 世界美術辞典』新潮社, 1985. 前2者では、表記はハンス・フォン・マレー、後者『新潮』ではマレーとなっている。
- 2) 筆者は以下の拙稿においてナポリ臨海実験所とその創設者アントン・ドールン、画家マレー、との関係について言及したことがある。高阪一治「ハンス・フォン・マレーの「ナポリのフレスコ画について」(上) 鳥取大学教養部紀要17巻, p.77-119.1983. また、高阪一治「ハンス・フォン・マレーの「ナポリのフレスコ画について」(中の2) 鳥取大学教養部紀要23巻, p.11-28.1989. も参照されたい。なお、これらの拙稿ではナポリ臨海実験所と表記せず、ナポリ臨海研究所と表記している。
- 3) 中埜栄三・溝口元・横田幸雄編著、『ナポリ臨海実験所 去来した日本の科学者たち』東海大学出版会, 1999. ちなみにこの書物の表紙ほかにマレーのフレスコ画が使われている。溝口元「日本の生命科学の自立とナポリ, ウズホール臨海実験所」, 誌上 科学史博物館13, 『学術の動向』p.86-91. 2007.9.
- 4) 以下の拙稿は19世紀後半、ないしは世紀末のドイツ語圏への美術と青木繁との関連を取り上げたものである。青木とマレーとの関連については註(31)で言及している。高阪一治「青木繁の『狂女』考-A. ベックリンとの関連より見たひとつの試みー」鳥取大学教養部紀要27巻, p.63-82.1993.

- 5) 「プロイセン文化財団ベルリン国立美術館所蔵 19世紀ドイツ絵画名作展」図録。なお筆者の拙稿も増刷分の図録の参考文献に挙がっている。

(2012年10月5日受付, 2012年10月25日受理)